

子どもの本に登場した犬

— 信じるということ —

大澤 啓子

父が動物好きだったせいで、私の子どもの頃の我が家には犬、猫、雉、鶏、などたくさんの動物たちがいた。中でも犬は特別で、いつも家族の話題の中心になっていた。今思えば犬のいる生活は、私たちが子どもにやさしさや思いやり、生きる力など、多く

のことを自然に教えてくれた。子どもの本の中にも様々な犬が登場するが、彼らは無邪気であったり、賢かったり、忠実だったり、どれも犬らしい犬である。時には人間以上に人間らしく生き生きと描かれ、犬と人との関係は暖かくこころを打たれる。そ

れほど犬は人の生活に入り込み、犬と人は切っても切れない関係となっている。

「うちに犬がいたらいいな」「犬飼ってもいい?」

「犬が欲しい」

子どもたちはいつもそう思うが、犬を手に入れるのも最近はなかなかむずかしい。昔は仔犬が公園や道端に捨てられていることもあったが、最近は捨て犬などめつたにいない。犬はペットショップで高いお金を払って買う時代になってしまったようだ。運がよければ、知り合いなどで生まれた仔犬をもらえることがあるが、あとは野犬收容所に登録だ。

ジョン・バーニンガム作『コートニー』（ほるぷ出版）に登場する三人の子どもたちも犬が欲しくてしかたがない姉弟だ。両親を説得して、ようやく野犬收容所から犬をもらってきた。

收容所にはたくさんの犬がいたが、子どもたちは

「だれもほしがらない犬」が欲しいという。係のおじさんが「どんな犬かだれも知らない、どこからきたのかもわからない。もらい手がひとりもない、じいさんいぬ」のコートニーを見せてくれた。

「コートニーがいい」といつて、子どもたちはその「じいさんいぬ」をうちへ連れて帰った。

こんな出会いをバーニンガムはさらりと描いているが、子どもたちはおおらかでゆつたりとした風貌のコートニーを、ひと目見て大好きになつてしまつたようだ。コートニーのほうも、だれからも顧みられなくなつて、今は收容所で寂しく最期を待つだけの身が、再び家族に迎えられようとは思つてもみなかっただろう。何のめぐりあわせだろうか、素敵な出会いである。

翌日からのコートニーの活躍ぶりは素晴らしく、「じいさんいぬ」のイメージはどこへやら、「犬」というより何でもできるお手伝いさんのようだ。最

近は犬でも盲導犬や介助犬、警察犬、救助犬というように仕事をもつ犬がいるが、彼はさしずめお手伝い犬、お助け犬というところか。人間の仕事をこなすばかりか、危険なことにも立ち向かう、なくてはならない存在の犬だ。そんなある日、子どもたちにとつてなくてはならない存在のコートニーがいなくなってしまうた。

不思議な犬だ。コートニーが子どもたちの家に来た時、彼はどこからか衣装の入ったトランクをもつてきたのだが、そのトランクも消えている。トランクには、CAIRO・SYDONY・OSAKA・NYなど世界各国の都市のステッカーがべたべたと貼ってあった。世界中旅をしてきて、風にあかれて、またどこかの国で子どもたちのお手伝い犬をしているのだろうか。

コートニーがいなくなつてからも不思議なことは



おこつた。海辺で子どもたちの遊んでいたボートが沖に流されてしまったのだ。かあさんは助けを呼んだが、ボートはどんどん沖合に……。が、その時、ボートは何かにつつばられるように岸にむかい、子どもたちは助かった。「いつたいていどういふことだったんでしようね」と作者は結んでいる。

ボートを岸に運んだのはコートニーだったのか。そうあつて欲しいとコートニーを信じる読み手の気持ちを裏切らないのは、崖の上に小さく描かれた犬の姿だ。やっぱりコートニーが助けにきてくれたん

だ、と宙に浮いていた読み手の気持ちを納得させてくれる。

子どもたちとその家族についても、どここの誰なのか名前も出てこないというのはどういふことか。どこにでもいる誰もにあてはまるということか。トラックのステッカーにあるように、コートニーが訪れた各地の子ども誰もが、愛するもの、信じるものを守られているともいえるのだろうか。その守り役者者はコートニーⅡ「犬」に与えた。犬は主従関係をわきまえ、どこまでも忠誠をつくし主人を守る。犬という動物はそれほど人との関係が深く、それは愛情でつながっているのである。

コートニーがどこからきて、どこへ行ったのか誰も知らない。まるで夢の中のような犬だが、いつもどこかで守ってくれる、子どもたちにとつて愛すべき大きな存在なのであろう。

人とのよい関係を切られてしまった犬もいる。

犬は大昔から人間の身近にいた動物で、人間のよき「友」であった。そして今は、飼われることがあたりまえの動物として存在している。しかし、何かの事情で人間世界から孤島に遠ざけられた犬たちは、犬だけで群れをつくり野犬となって生き延びていった。

椋鳩十作『椋鳩十の野犬物語』（椋鳩十まるごと動物ものがたり3・理論社）の中の「丘の野犬」のアカも離島で生きてきた野犬だ。これらの野犬はのら犬とちがって、数百年も昔にこの島に捨てられた飼い犬が野生化したものだ。彼らは時々山から里におりてきて家畜や人を襲うので、とても怖がられていた。

お百姓の松吉が丘の畑を耕していると、一匹の野犬が岩の上に座ってずっとこちらを見ている。毎日

同じ場所に来るので、初めは気味悪く思っていた松吉だが、その犬にだんだん親しみがわいてきた。おにぎりをやっているうちに、犬は後をついてくるようになり、とうとう松吉の家の床下に住み着いてしまった。松吉はその野犬をアカと名付けて可愛がったが、アカは松吉以外の人にはなつかなかった。

ある時、部落のニワトリやウサギが頻繁にいなくなり、松吉のところのアカがあやしいといううわさが広まった。アカを野犬狩りに引き渡すため毒のエサを与えなければならなくなり松吉は悩み後悔する。こんなことになるのだったら、野犬のままそつとしておけばよかったのに……。

切ない話である。人間に捨てられて何世代も生き延びてきた犬は、人間との交流を取り戻せるのか。数百年の間失っていた関係だが、犬本来の人に寄り添う性質を思い出すのに時間はかからなかった。作

者によると、犬が人のツバのついたエサを食べるということは、その人と犬のところが近づいたことを意味するという。賢いアカは松吉のツバのついたおにぎりを、最初は用心深く遠巻きにながめていたが、しだいに近づきもつと欲しがるようになり、松吉にこころを許すようになった。

作者の椋鳩十は「遠山犬トラ」という話の中で、「犬という動物は、あれでなかなかの寂しがりやなのでしょうか。あるいはまた、いつもなにかを愛していないければいられないのでしょうか。そしてまた、犬という動物は、人間をすっかり頼りきっているのでしょうか……。」と語っている。では、野犬はどうなのだろう。アカは普通の犬とはちがいで野犬だ。そう簡単には人にこころを許さない。が、野犬といつても先祖は飼われていた犬。数百年前の遠い先祖の記憶が、松吉の愛情でだんだんほぐれてき

た。松吉の投げるおにぎりを食べるうち、松吉の近くにいたいという気持ちが生まれてきたのだろう。

そして、アカが松吉をすっかり信頼したときに、アカに思わぬぬれぎぬがかかる。

人間とは何と身勝手な生き物なのだろう。野犬狩りから身を守るにはアカは松吉を頼るしかなかったのに、松吉は本心ではないとはいえアカを裏切ることになった。犬は絶対に主人を裏切らない。裏切らないのが犬なのだ。しかし、松吉の心中を思うところ痛む。孤独な者同士、こころが通じ合えたと思ったが、野犬の現実はきびしい。

それから数か月がたったころ、松吉は丘の畑の岩の上でアカと再会した。松吉はアカが生きていたことをよろこびアカの名を呼んだが、アカは尾も振らず、近づくとそのまま林の中に見えなくなってしまう。野生であるが故に飼いだにもなりきれず、

また、人の愛情にふれてしまったために山に帰ることもできず松吉のそばにいたい気持ちを抑えることができなかったアカ。松吉は泣きながら「これでいいのだ、この方がいいのだ」と考える。その時、アカもまた、自分の名を呼ぶ松吉のなつかしい姿を確認し、目の前にいる松吉の昔と変わらぬ愛情を感じながらも、もう松吉のそばにはいられないことを悟り、「これでいい」と思ったのではないか。

アカは二度裏切られている。遠い昔、島に捨てられた記憶、そして今回。信じ切つてこそ人と犬の関係なのである。自分に愛情をかけてくれる人を信じ、その人の愛情に応えようとする、犬とはそういうものなのであろう。犬の性質と行動を知り尽くした、犬への思いのこもった話である。

(駒場幼稚園)